

弘教寺



第50号

発行所

〒370-0131
伊勢崎市境米岡二七九-二
浄土真宗本願寺派弘教寺
寺報編集部
電話 0270(七四)0573



寺のQR

東京パラリンピックを通して

弘教寺住職 中山英昭

今夏東京オリンピックが続いて、東京パラリンピックがコロナ禍の中、開催されました。無観客の大会となり、厳しい感染防止体制の中でしたが、無事終えられたことは良かったと思います。テレビ観戦がほとんどでしたが、水泳、陸上、車いすバスケット、パラリンピック競技ならではのボッチャ等それぞれに感動の場面に出会うことができました。障害の程度により細かく競技の種類が分かれているのもハンデイの状態に応じてより参加し易い工夫だと思いました。

東京パラリンピックを通して感じたことを書かせていただきます。前回の東京オリンピック(昭和三十九年)の時中学生になった年でした。その時にもパラリンピックは開催されたと聞きました。少年期でしたので、関心をもたなかったのか、報道関係も特に重要視せずに報道しないことで、国民に開催されたことを認知されないまま終わってしまったのか定かでは有りませんが、関心が薄かったことが実態としてあったと思うのです。

今夏のパラリンピックはコロナ禍の中で直接の観戦は難しかったですが、テレビ等の報道で連日取り上げ非常に盛り上がった大会で

あつたように思います。

障害のある選手が晴れ晴れと競技する姿に勇気をもらったり、挑戦することの素晴らしさに大きな感動を受けました。都内の小・中高の学生を学習の一環として観戦させる予定だったようですが、コロナ禍で実施できなかったのは残念でした。

日本人のパラリンピック競技者が開催中のインタビューの中で言われたことが今も耳に残っております。そのままの言葉ではありませんが、「障害者という特別な人と見て頂くよりも、普通の人として見てほしい」と言うことです。

障害を持つている方々が普通に社会の中でハンデイを持ちながらも区別なく、差別なく普通に生きていけることが大切のように思います。多くの障害を持つている人々の願いではないかと思えます。

先日NHKのニュースで中国の上海市で今『モフモフの手』というパーラーのお店が大盛況で人気を集めているというのです。全て飲み物をスマホで注文し屋外で待つと、30センチ位の壁の穴から柔らかいモフモフの手で飲み物が出さ



れます。手で触れたり顔で触れたり若者を中心にその面白さから人気が広がったようです。このお店の従業員は全て聴覚に障害を持っている人々です。注文もスマホ、精算もスマホと不自由ない対応ができ、従業員と記念写真を撮る人も多いようです。以前より給料も多くなり、生活も楽になったとのこと。アイディアや適した職種によってしっかりと自立生活が可能であると思うのです。上海の例は私たちにそのことを示してくれていると思います。

市町村の職員、企業の社員の中で何パーセントかの採用が義務付けられているようですが、達成率はどこも満たしていないようです。義務的に採用しようとしても双方に無理がある結果かなと思います。障害のある方にとってその特性を見出し、適職を見出していくことが大事になるのではと考えます。

障害のある方が社会で普通に生活できる『共に生きる社会』をつくらせていくことは私たち一人ひとりの責務であると思われま

す。華やかな競技を見つつ、障害のある方々が普通に働き、普通に地域社会の中で共に生きていける社会になるよう願います。 合掌

※前号『葬儀社さんそれでいいの?』の中で旧境町地域と誤解されやすい表現でしたが、葬儀社が多数存在する伊勢崎・太田地域での事として書かせていただきました。多くの葬儀社さんは善良な運営をされておりますこと付記させていただきます。

「携行本尊」を知っていますか？

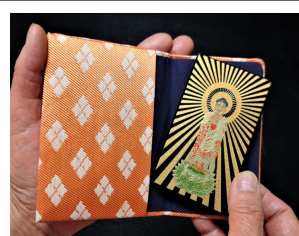
山本山願寺は、阿弥陀さまをいつでもどんな時でも感じられるよう、新たに名刺サイズの「携行本尊」を制定し、4月から交付を始めました。

仏协会会员の方々が、『本願寺新報』に紹介されたのを見ていち早く「携行本尊」を求めました。バックに入れていつも身近に持ちたい、息子たちに贈りたい、仏間の隣の自分の部屋に置きたい、夫が入院していた時に置いてあげたかった、施設でもよく勤行していた母にあつたらよかった、嫁ぎ先の自分の部屋に置きたいなど様々な理由で求められました。そして、皆さん、「阿弥陀さまがいつもご一緒」と感じられて心が落ち着きますとお話しされました。

「南無阿弥陀仏」と家族でお仏壇に手を合わせる機会が少なくなり、子どもたちが実家を離れる、入院や施設入所などで自宅外生活になるなど生活環境も変化しています。また、コロナ禍では、人との接触が避けられ孤立化の風潮が進んでいます。でも、人はつながり関わりあつてこそ、互いに生かされます。

そんな私たちに、阿弥陀さまは、「独りじゃないよ。いつも一緒だよ」と語りかけ見守り、心のよりどころとなつてくださっています。

(坊守)



※「携行本尊」をお求めになりたい方は、弘教寺へご連絡下さい。
冥加金は一万円です。

『本願寺新報』の記者来たる！

10月、仏教婦人会例会と「うづき会（書写の会）」が、本願寺新報の取材を受けました。山本山願寺では、門信徒の方々に阿弥陀さまとともにある生活やお念仏を喜ぶ日々を送って欲しいと「携行本尊」や「正信偈」の書写を勧めています。4月、9月と「携行本尊」を数人の方々が求めたことがきっかけで、弘教寺が取材対象になつたようです。



本願寺新報の星記者は、二日間とも午前は活動の様子を、午後にはそれぞれの人へのインタビューの形で取材しました。熱心に答える仏协会会员の「携行本尊」への思いがそれぞれに深く、感銘を受けました。「うづき会」では、これまで何も考えず読んでいた「正信偈」を大悟師のお話によって言葉に着目しながら味わわせてもらえる、無心に書く時間が持てることで気持ちも落ち着くなど、書写の会は、とても有り難いとお話が出て、会の意義を感じました。現在のテキストは「書いて味わう正信偈」ですが、ゆくゆくは、「書いて作る勤行聖典―正信偈―」をテキストに、正信偈を手作りできるようにしたいものです。



星記者の熱心な聞き取りにより、皆さんは一生懸命に素直な思いを語ってくれました。今回の取材結果は、弘教寺や仏教婦人会の様子も含め、『本願寺新報11月20日号』の一面トップ記事として掲載されました。

(坊守)

秋の彼岸会法要を勤める

今年の9月、県内もコロナの緊急事態宣言が出された中で秋の彼岸をむかえました。例年ですと太田市を中心に東毛地域を参拝するのですが、宣言下では参拝には無理があると判断しまして、寺での彼岸会法要をお勤めすることになりました。東毛地域の門徒の皆様が対象ですが、ご懇志をお送り頂き、参拝者無しでの法要となりました。



初めてのことで多少の心配がりましたが息子と二人での法要となり、滞りなく法要をお勤めすることができました。

東毛地域の皆様には紙面を通じて、秋の彼岸会法要を無事お勤め致しましたことご報告申し上げます。

春と秋の彼岸法要は地域を分けて門徒さん宅を参拝して回ります。門徒さんの家にお伺いすると門徒さんの家の状態やお話したいことなどが直接にお聞きでき、大変意義あることと思っております。

来年度には感染が収束し、また今まで通り門徒さんのお宅にお伺いし、お参りできますことを願っております。

合掌(住職)

真悟の京都日記（14）

今回は、今年の4月に交付が開始されました「携行本尊」についてお話ししたいと思います。私の通う中央仏教学院では、今年の4月から7月までコロナの影響によりほとんどの講義をオンラインで受講していました。ですから、毎日行われる朝と夕のお勤めでは、私は毎回カメラの向こうにいらつしやる阿弥陀さまに合掌していました。しかし、手を合わせるたびに、阿弥陀さまのお姿を肉眼ではなく画面越しで拝顔するのはなんだかなんと、もやもやした気持ちが湧いてきておりました。そんな中、私の気持ちを察したかのように講師の先生のお一人がこの「携行本尊」の存在を教えてくださいました。更に偶然にも、母から「携行本尊」を贈りたいと連絡がありました。

そこでこの度、「携行本尊」の交付を受け、まさに手のひらサイズのご本尊をお迎えするに至りました。立てられるケースも併せて手に入れた私は、常に阿弥陀さまのお姿に向かえるよう常用の机の上にケースを立て、手を合わせています。出かけるときにも大切に身に着けることができ、大変有り難い思いでおります。

私を見守ってくださる阿弥陀さまのお姿が、常にご一緒の安心感は、言葉に表し難い喜びであるなあと感じております。

この文章を読んでくださる皆様にも是非お勧めしたいと思うところです。

合掌

（中山真悟）



木曜会報告（四）『七高僧の教え』

今回は第三祖の曇鸞大師です。六世紀ごろに北中国山西省で生まれたと言われています。

大師は膨大な經典の註釈書を作る途中で病氣になり、南中国に道教の第一人者、陶弘景を訪ねて不老長生の教え「仙經」を授けられます。

しかし、インドから来られた菩提流支に、「仙經はたとえ長命を得ても迷いの世界を輪廻するだけ」と言われ、浄土教の書物が授けられます。

「これによって学べば、きっと生死を解脱することができ」と教えられ、己の非をさとる仙經を焼き捨てて浄土教に帰依されました。

大師の代表的な著作は、天親菩薩の『浄土論』を註釈した『往生論註』（以下は論註）です。

浄土真宗の教えを示す言葉の「他力回向」はこの『論註』から導き出された語です。

大師は、「他力回向」には往相回向と還相回向があると説きました。往相回向とは自己の修めた功德を一切衆生に施して、共に浄土に往生しようとする働きであり、また還相回向とは浄土に往生の後、すみやかに再び迷いの世界に還つて来て、自らの功德を衆生にめぐらしさしむける働きとしています。

しかし、親鸞聖人は往相・還相回向ともに、如来の本願力によって如来の功德を衆生に回向されている、即ち如来の回向であることが大師の真意であると見られております。

合掌

（橋本勝）

参考文献『はじめて学ぶ七高僧』黒田寛忍著

※都合で表題を「木曜会」に変更

木曜会報告（四）『お経ってなに？』

日本では、仏教の聖典は宗派ごとに異なり、しかも漢文で書かれています。そのため聖典の全体がわかりません。そこで、その数とそこにあるようなことが書かれているのかを調べました。

まず、その数ですが、お釈迦さまは「八万四千の法門」を説いたといわれていますが、これは多くの「教え」を説かれたという意味で、実数ではありません。仏教の入門書等では、聖典の数は膨大というだけで具体的な数は示されていません。

しかし、お釈迦さまの教えを色濃く残しているといわれるパーリ語の原始經典『ニカーヤ』は5381経で、それを漢訳した『阿含經』は2815経で構成されています。

つぎに、聖典に書かれている内容ですが、そこには浄土真宗がよりどころとした『浄土三部經』のような内容だけではなく、天文、地理、鉱物、植物、動物、生理、衛生、医学、薬学、論理、心理、政治、経済、社会、家庭、職業、風俗、習慣などがあり、また寓話、笑話、説話、物語と面白い話が無数にあるそうです。

最後に『ニカーヤ』の詩句の一つを紹介しましょう。

「他人の間違いに目を向けるな、他人がした事、しなかった事に目を向けるな。ただ、自分がやったこと、やらなかった事だけを見つめよ」

（山本勇三）

参考文献①『お経の話』渡辺照宏著

②『真理のことはブツ』佐々木閑著



蚕卵紙(明治時代)

幼い渋沢栄一少年が歌を歌いながら大事に育てた「お蚕さま」は、時を経て近代日本を支える大きな柱となったのです。

(中山大悟)

「日本資本主義の父」渋沢栄一の生涯をえがく「青天を衝け」は、パリ、改正掛と進み、いよいよ第一国立銀行設立まで来ました。

さて、改正掛でのワンシーンに、蚕卵紙さんらんしを知らない部下に対して「そんなことも知らないのか」と呆れたシーンがありました。当時の最も重要な輸出品は生糸と蚕卵紙でした。生糸はともかく、なぜ蚕の卵が輸出されていたのでしょうか。

実は幕末の1850〜1860年にかけて、ヨーロッパで蚕の病気が蔓延して、養蚕業に壊滅的な被害が出ていました。そのため、病気に侵されていない日本の蚕の卵を輸入しようと考えたわけです。

しかし、特に大きなダメージを受けたフランスの養蚕業はなかなか再興せず、自国生産をあきらめ、後進国を指導して、安定的に輸入する政策に転換して行きました。そうして作られたのが富岡製糸場です。富岡製糸場は上質で均一な生糸を作るための模範工場として日本で初めて建設された工場です。富岡製糸場ができたことで上質な生糸を効率よく大量に作るできるようになりました。しかも、ここで学んだ工女たちが地元に戻り技術を伝えて各地に製糸工場が建つことで、日本経済を支える一大産業になっていきました。事実、当時の輸出品の生糸が占める割合は長い間1位であり、多い時では5割近くを占めるほどでした。こうして出来上がった養蚕業は明治、大正を経て昭和の初め戦前まで、近代日本の経済を支えました。

渋沢栄一と「お蚕さま」

渋沢栄一の故郷を訪ねて



10月18日、コロナで伸びのびになっていた栄一の故郷ツアーがやっと実現しました。肌寒い朝でしたが「青天を衝け」にふさわしい青空の一日でした。ドラマ館前で境町からの皆さんと合流し、坊守と大悟さんの案内でゆかりの所を六ヶ

所見学して来ました。ドラマ館入口でふっかちゃんがお出迎えです。テレビでお馴染みの「中の家」のセットや役者さんの衣装やサイン色紙等展示してありました。諏訪神社では獅子舞奉納が前日のテレビニュースで放送されていましたが、当日は何もなかったような静けさでした。中の家と渋沢栄一記念館で、栄一のアンドロイドに対面し講義で本人の声を聞き100年以上前の人が現代によみがえったようたびつくりしました。尾高惇忠生家と渋沢栄一記念館では、それぞれ説明して下さるボランティアの皆さんが「忠恕」の心で渋沢栄一の志を受けついで接して下さい、楽しく見学出来ました。

まだ夫を亡くし心寂しい日々ですが、婦人会の皆さんに会うと心がほっとします。

一日に感謝。合掌

(佐藤静枝)



※編集後記※

庭の金木犀、もみじ、山茶花は自然に季節を告げております。ありがたいことです。

先日、真鍋淑郎さんから3人がノーベル物理学賞を「地球温暖化を予測する地球気候モデルの開発」との理由で授賞されました。人間の活動が自然に与える影響の研究で、地球温暖化に対する先駆的警鐘です。私たちが今なすべきことは、寺田寅彦の言葉にあるように、「自然と向き合うのではなく、自然とつながる」ことではないでしょうか。この感覚を一人ひとり心がけたいものです。

(橋本勝)

◆ 行事予定 ◆ 令和3年 12月～ 令和4年 3月

月別	弘教寺の行事予定		教区・群馬組の行事予定	
12月	5日	報恩講法要		
	12日	壮年会例会		
	18日	餅つき会		
	22日	婦人会例会		
1月	1日	元旦会	9日～16日	ご正忌報恩講法要
	19日	婦人会新年会		
	30日	役員新年会		
2月	13日	壮年会例会	未定	実践運動研修会
	17日	婦人会例会	未定	仏壮結成記念日研修会
3月			18日～24日	春彼岸
	29日	婦人会例会		